

まえがきにかえて——「話体表出の方法」について

「先生、先生」と言われ続けて何十年にもなる。そうすると「先生」は大体がバカになる。先生がバカになるのはわかりきった理由がある。自分より少しはバカな人（学生たち）を相手に教え続けるからだ。だからバカな人はどんどん賢くなっていくけれど、自分自身はバカなままにとどまる。社会人なら「お前はアホか」と言われ続ける二〇代、三〇代でも、「先生」と言われ続けるのだから、おかしな大人になるに決まっている。そうして自分のバカが学生にばれそうになったときに、選択科目は半期で変わり、担当学年が変わり、入学生と卒業生が変わり、学生は消えていく。先生のプレゼンスは長くても四年もてばいいわけだ。先生のバカはそうやって二重に守られている。

百歩譲って、*「教え方」*はどんどん賢くなっていくと言ったところで、知っている内容が変わらない点では一緒のことだ。「教え方が変わるることによって教える内容も変わる」ともっともそうなることを言う人もいるが、それは*「教え方」*という言葉の乱用にすぎない。「教育」というのは、*「教え方」*の研究——文科省は「教育研究」という便利な言葉をよく使うが——でもって教える内容を棚に上げるシステムだと思っただ方がいい。「先生」と言われる以上は、それくらいの恥を覚悟しないと。

千歩譲って、「先生」の相手は学会に集う研究者たちであってバカな人（学生）ではないと言って、日本ムラのような学会で論文業績を作るとは、大学全入時代の学生を人材として育てるより遥かに簡単なことだ。もっとも私の経験では、〈教育〉に関心のない教員より、〈研究〉に関心のない教員の方が遥かに教育力がない。百歩譲っても千歩譲っても、しかしいずれにしても「先生」は変わらない。

昔、トロツキーは、「ロシア共産党はすべてを変えたが唯一変わらなかったものは、そのロシア共産党自身だ」と言ったことがある（埴谷雄高は何度もこの言葉を紹介していた）。前衛主義や啓蒙主義が破綻するのは、自分が考えていることについていつも「知ったかぶり」をするからである。

前衛主義や啓蒙主義の本性はいつも軽薄で保守的なものにすぎない。映画「ミッドナイト・イン・パリ」に出てくる大学教授やアメリカ文化もそれと似たところがあるのかもしれない。

まえがきにかえて
ラテン語の格言で Docendo discimus（ドケンドーディスキムス）という言葉がある。「教えることによつて学ぶ」という意味だが、これはくだらない『学び合い』教育とは何の関係もない。いつでもどこでも最高判断、最高認識が露呈する仕方では学ばずに接しなさいということだ。学ばずの程度を考へることは教える者自身の墮落に他ならない。留保なく教えることができるときにこそ、〈教育〉と〈研究〉は重なることが可能になる。そもそも学ばずの程度を選ばないためにこそ専門性探求は存在するのではなかったのか。できない研究者ほど、学ばず者（の程度）を選びたがる。そんなに偏差値の低い学生が嫌いななら、偏差値の高い大学へ行けばいいじゃないかと言いたくなるくらいに。

「教えることによって学ぶ」とは、教えることによって自分を空っぽにするほどまでに最高判断で語りなさい、教える者自身が一から学び直さなくてはならないまでに学びなさい。教えなさいということだ。

私が大学の最初の教壇に立ったのは四〇〇名の受講者のいる階段教室だったが、一コマ目で話すことが尽きてしまったことがある。そのとき私は、一〇年以上哲学（ハイデガー・フッサール、および現代思想）の勉強に集中してきた私のストックの貧弱さに自己嫌悪しきりだった。一〇年はたかが一〇年でしかなかったわけだ。「有益な」情報が学生であつてもすぐに手に入る昨今の状況では、当時の一〇年はいまの一年。だからいまの大学の教壇に立つには一〇〇年はかかるということだ。田辺元でさえ、講義の曜日の二日前から毎週面会謝絶だったらしいから、一〇〇年も決して大げさな話ではない。

トークというのは、研究者にとって通俗の極みのようなところがあるが（そんなものは政治家にでも任せればよいというように）、ときとして書き言葉よりは遙かに圧縮率が高いことがある。五〇〇枚の論文の内容も九〇分のトークで語り尽くせることがあるように。書き言葉はストックを積み重ねてとんど観念的、体系的になってしまいが、トークは一言で認識を地べたに引きずり落とすことがあるのだ。若輩者の私にとってストックが足りないのはもちろんのことだが、トークの解体力というのはとてつもなく私自身の「学ぶ」姿勢を揺さぶり続けたと言える。

ところで、この本の諸々の記事は二〇〇一年以来書き続けてきたブログと式辞・講演録からなっている。「ブログ」と言っても半分以上は仕事関連の記事だ。だからブログ本という趣とは少し異なる。それには理由がある。

もともとブログを始めたのは、一九九五年に私が学内にロータスノートを入れたことが機縁になった。学生すべて+教職員すべてをノーツクライアントにしたのが一九九五年だから、全国の（大学を含めた）学校の中ではグループウェア導入の最初の組織的事例だったと思う。まだ高速LAN規格も決まっておらず、「イントラネット」という言葉がやっと出回り始めた頃の話だ（当時ITOKIなどは「内部インターネット」という言い方をしていた）。一九九五年に全教室定員数の「情報コンセント」（懐かしい言葉！）が存在しているというのも日本で最初の校舎設計だったと思う。サーバーですべての授業のシラバス・コマシラバス、および教材テキストを管理したかったのだが、当時テキストデータベースとしてはノーツが最良のものだった（全記事、全文フルテキスト検索ができるものは当時ノーツしかなかった）。

そのノーツの全学掲示板に、グループウェア活性化の演出も含めて日々書き込んでいたが、まだグループウェア掲示板に何を書き込めばいいのかわからない教職員から、「芦田さんの書き込みは管理職のくせに私事が多すぎて公私混同している」という風評が出回り始めた（いまなら笑い事で済ませられるが）。その風評は大学時代の恩師の追悼記事を書き込んだときに頂点に達した。ネット時代の「公私」とはなかなか難しいものだというのがそのときの私の印象だった。それはいまでも何も解決していない。

ツイッターのように秒刻みで私事を「公表」するメディアが登場しているいま、その問題はもっと

複雑なものになっている。論文にも教育にも関心のない暇な大学教授や仕事の少ない小企業の社長が空虚な「オフィスアワー」で「公」を交えてツイートするのもいまでは慣例に近いものとなりつつある。現代の掲示板とも言えるツイッターでは公私共々偽装する傾向があるが、それは意識的なものばかりではない。旧来の公私の概念が崩壊しつつあるということだ。

そういった事態の萌芽とも言える掲示板騒動を一〇年以上前に経験して、私は学内掲示板への記事アップを当分差し控えることにした。その結果が私のブログ『芦田の毎日』だった。それもあって、私のブログはほとんどすべてのもものが仕事場の諸問題に関わって形成されたものとも言える。単なる学内掲示にとどまらなかったという意味では、内閉的になりがちな「学内」文章も少しはまともなものになったのかもしれない。

ブログで私が確かめようとしたのは、トークと書き言葉、私的な文体と公的な文体との接点だった。「公的な」とここで私が言うのは、二〇代〜四〇代前半までの〈哲学〉学究時代の「論文」、ストックの文体のことだ（一部は拙著『書物の時間』にまとめられている）。私の仕事をいまでも支えているのはほとんどすべてこの時期に形成された思考だが、哲学論文の概念思考ばかりでは四〇代、五〇代以降の組織の思考を形成することはなかなか難しい。それは会社組織はもちろんのこと、大学を含めた〈学校〉組織でも同じことだった。

学究上の論文は長い溜めを待ってくれるが（最近では一年単位で論文業績を求められるために、即席ライメンのような論文も増えているが）、組織文書では日常的に巻き起こる案件に引きずられた文体を強いられる。孤高を保つか、疲弊し続けるか。それとも両者の限界を同時に乗り越えることができるような文体を形成するか、そんなことが本当にできるのか、それが、私がブログに込めた思いだった。

昨年亡くなった吉本隆明は、中期以前の太宰治の文体を評して〈構成的な話体〉と言ったことがある。「太宰のばあい自己の〈私〉意識の解体が意識されればされるほど話体表現は風化や横すべりに走らずにかえてって構成的になるという逆説がはじめて成立した」（『言語にとって美とはなにか』というものだ。あと一步外れると通俗に堕してしまう太宰の文体の彩をこんなふうにくぐった評論に当時高校生は衝撃を受けたが、その本来の意味については長い間わからないままだった。

インプットとアウトプットとが同時に生じるネットの文章を書き続けていると、吉本が〈表現転移論〉でやろうとしたことの意味がよくわかる。フロー（話体）に文体がずーっと晒され続けるからだ。これは読者の多少を問わない。書き手の質も問題ではない。まさに話体を構成的に形成できるかどうかに関わっている。ネットの書き手はいつでも「風化や横すべり」に晒されている。

特にブログは制限のない長文というフローを出現させたし、ツイッターでは開き直った短文が大手を振って公共化された。「三・一一では大いに役立った」「無名の者が一気に多数を獲得できるまったく新しいメディア」というように。吉本が（太宰を）芥川よりも重要だとまで言って、守ろうとした文体の質―「話体表出の方法」と吉本は言っていたが―はどこへ行ったのだろう。

この本の文体が、概念展開でもない、講演・講義録でもない、そしてブログの文体でもないとすれば、「話体表出の方法」に私が少しはこだわったからかもしれない。

もちろん「話体表出の方法」というのは、吉本が言語の〈像〉、「大衆の原像」(を知識の課題の中に「繰り込む」と呼んだもの)に関わっており、彼のキー概念である指示表出と自己表出との交点の課題でもある。私が少しくらいこだわったところで思いが叶うものではないことは私自身が一番わかっている。

一方で「話体表出の方法」にこだわった吉本がいる。一方で秒刻みに根こそぎ「話体表出の方法」を解体するツイッター現象——一つ一つの秒刻みの「つぶやき」にまでアドレスが存在するという情報——が存在している。私の試み自体はどんなに脆弱でも、この事情がどうなっているのかに関心を持たないわけにはいかない。

私がこの本をまとめる気になった動機はそんなところだが、ヘーゲルは、前書き (Vorrede) はもともと余分なものだと何度も繰り返していた。動機は〈本文〉の中にこそあるからだ。本文から離れた動機など存在しない。前書きなどはほとんどウソかもしれない。確かにそうだが、しかし、ヘーゲルほど序文が好きな哲学者はいなかった。ドイツ本国では『ヘーゲル序文集』という本まで出ているくらいだ。

前書きは、出版社や編集者から言えば読者と本文をつなぐ架け橋なのだろうが、自分で架け橋を作る著者というのもおかしなものだ。架け橋自体も〈本文〉の役目だろうからである。それに前書きだけで、前書きを読んだからこそ、そこで〈本文〉へと進むのを止める読者も多いに違いない。そうすると架け橋もまた、単なる本の体裁にすぎない。結局、どんなに理屈をつけても前書きが存在する

理由などない。

「でもねえ」と言う著者がそこにいる。終わったときにこそ、人は何か一言言いたくなるものだ。終えたいという気持ちと続けたいという気持ちの表れが、前書きへと人を浮力のように誘う。生きることの余分、生死の余分のように前書きが存在している。ヘーゲルのように体系的な美を求めた哲学者でさえそうだった。よく考えてみれば、吉本の言った「話体表出の方法」とは〈体系〉に出入りする過剰——ハイデガーの言う「傍ら (an) 」にあるものとしての予感 (Ahnen) ——を組織することだったのかもしれない。そのことにこの本が成功しているかどうかは、私よりほとんどの人が若いであろうこの本の読者たちに委ねるしかない。

二〇一三年三月一八日 東京品川・桜芽吹く御殿山にて 芦田宏直